

グローバル化と 日常文化のあいだ



ほしのともゆき
星野智幸
小説家

日墨文化サミットに参加して



日本ーメキシコ間で初の文化サミット「日墨文化サミット」は、メキシコ・シティのチャブルテペック城で行なわれた。会場となったサロンは画家シケイロスがメキシコ革命を描いた壁画で三方を囲まれていた

日墨

（日本・メキシコ）文化サミットが開かれたのは、チャブルテペックの丘に建つお城のなかだった。メキシコ・シティを一望のもとに納めるその丘からは、遠くの山並みまで見渡せた。

山並み？ 嘘でしょ？

私は目を疑った。その風景を見て、私はメキシコが変わったことに気づいたのである。

◆ 経済発展が街の空気を変えた ◆

巨大な盆地であるメキシコ・シティは、周囲を山に囲まれている。けれど、十数年前、私がこの街に住んでいたころは、その山々を目にすることはまずなかった。大気汚染がひどかったせいである。ガソリン臭のするスモッグは、このメガロポリスの風物詩ですらあった。

ところが、久しぶりに立つメキシコの地で、その臭いは希薄なのであった。これじゃあメキシコに来た気がしないじゃないか、ともの足りなく思うほど、空気は爽やかに澄んでいる。そして、

〈日本側〉(敬称略、座長以外は50音順)

- 1 ◆ 小倉和夫
国際交流基金理事/日本側座長
- 2 ◆ 伊東豊雄
株式会社伊東豊雄建築設計事務所代表取締役
- 3 ◆ 高坂節三
コンパス・プロバイダーズLLC.日本代表
- 4 ◆ 恒川恵市
東京大学教授
- 5 ◆ 中村桂子
J-T生命誌研究館館長
- 6 ◆ 永井多恵子
NHK副会長
- 7 ◆ 星野智幸
作家
- 8 ◆ 養 豊
金沢21世紀美術館館長、金沢市助役

〈メキシコ側〉

- 1 ◆ サリ・ベルムデス
国家文化芸術庁 (CONACULTA) 総裁
/メキシコ側座長
- 2 ◆ ハイメ・ヌアラルト
CONACULTA副総裁
- 3 ◆ セルヒオ・ゴンサレス・ガルベス
元外務次官、元駐日大使
- 4 ◆ ペドロ・アンヘル・パロウ・ガルシア
ラス・アメリカス大学学長
- 5 ◆ アルフレド・ホスコウィックス
国立映画研究所所長
- 6 ◆ フリエタ・フィエロ
国立自治大学科学部兼天文学研究所教授
- 7 ◆ フリオ・ミジャン
Corazaグループ代表
- 8 ◆ ルイス・マルティン・ロサーノ
メキシコ近代美術館館長
- 9 ◆ エンリケ・ノルテン
建築家
- 10 ◆ カルロス・アシダ
カリージョ・ヒル美術館館長



サミットメンバーの発表や討論を熱心に聞く参加者



ほしの ともゆき ●早稲田大学第一文学部卒業。新聞社に勤務後、1990年代前半に2年間、メキシコに留学。97年、『最後の吐息』で文藝賞を受賞、作家としてデビューする。主な著書に『目覚めよと人魚は歌う』(三島由紀夫賞)、『ファンタジスタ』(野間文芸新人賞)、『在日ワロシヤ人の悲劇』、『アルカロイド・ラヴァーズ』

周囲の山影が薄青く見えている。

メキシコが取り組んできた環境対策が、実を結んできたのだろう。大気汚染の元凶の一つであったオンボロ自動車姿を消し、かつては庶民に手の届かなかった真新しい無鉛ガソリン車が普通に走っている。それだけ、中産階級の経済力がアップしたということだ。

このことは、サミットのあとでメキシコ人の友人と再会したときにも思い知らされた。安月給の郵便局員だった友人は、資金を貯めて入手した新車で2年前より個人宅配便を始め、今では家を買ひ、車も最高級の日産車に買い替えようと考えている。真面目に努力すれば、そのような仕事が成り立つ時代になったのである。

そんな経済状況が背景にあつて、日

本とメキシコは自由貿易協定を結んだ。この機会に、経済だけではなくお互いの内面をもっとよく知ろうという気分が盛り上がりつつ企画されたのが、この日墨文化サミットである。

◆ 国民国家と固有の文化 ◆

会議は2日間。初日のセッションは、チャプルテペック城の屋上にしつらえられたガラス張りの会場で行なわれたが、雨季の冷たい風にさらされたため、2日目はシケイロス作の壁画に三方を囲まれたサロンに移った。かつては独裁者の宮殿だったその城の内壁に、シケイロスは独裁者を倒す革命の様子を、赤と黒と銀色を主体とした激しいタッチで描きつけた。発表する私が右手の壁を見ると、農民たちの銃殺隊がこち

らに向けて銃を構えている。下手なことを口走つたら射殺されそうな迫力。主催したサリ・ベルムデス国家文化芸術庁総裁と小倉和夫国際交流基金理事も含め、総勢18名が参加したのだから、百出したその意見を集約することは難しい。

そのなかでまず興味深かったのは、「グローバリゼーションと文化の多様性」と題した第一セッションで、商業主義と文化は相容れるのか、という点に議論が集約されていったことだ。私を含め、参加者の大半は、芸術を商業の観点から考えることには拒絶感を示した。

ここでわかるのは、今回テーマとなっている「文化」は、ポップス、アニメ、漫画、テレビドラマ、エンターテインメント小説や映画といった、いわゆる大衆文化を含んではいない、ということである。好き嫌いかかわらず、私はそれも文化だと思つが、今回の文化交流はひとまず芸術交流という窓口に絞られるようだ。

それから、「文化」という概念は多くの人にとって今で

も国民国家のアイデンティティなのだ、ということも改めて確認した。「グローバル化のなかでいかに固有の文化を保持するか」「文化はマーケティングとは切り離して考えるべき」といった言葉のなかには、文化はわれわれのアイデンティティの根幹なのだから軽々しく手を触れてはならない、という恐れも含まれているようにも感じる。

外からの近代化という共通体験 ◆

恒川恵市氏（東京大学教授）ら何人が指摘したように、グローバリゼーションとは、19世紀の「近代化」の延長にある現象だという捉え方には、私も同感であった。その意味で興味深かったのは、2日目の第3セッションで発表された、ルイス・マルティン・ロサーノ氏（メキシコ近代美術館館長）の分析である。日本もメキシコも、19世紀以来、西洋に組み込まれていく歴史のなかにあるが、メキシコは先住民の文化、日本は鎖国時代の文化という、西洋の文脈とは異なる文化を抱えているため、外からロマン主義的な視線にさらされながらも、ダイナミックな新しい文化を世界に突きつけた。であるがゆえに、メキシコ芸術を西洋に組み

込まれたものだけ見なすのはいかがなものか、と彼は疑義を呈する。

伊東豊雄氏（建築家）が第2セッションで、メキシコのモダニズム建築家ファン・オゴルマン（フリーダ・カローとデイエゴ・リベラの家を建てた）を例に述べたとおり、日本とメキシコには、近代化によってアイデンティティが引き裂かれた傷跡が今でも残っている。その傷をもたらしただけであるアメリカとの関係についても、共通する部分があるはずである。そして、その傷跡から新たな文化が立ちあがるというロサーノ氏の認識は、日墨の文化交流を進める上で基礎となるものだと私は感じた。

さらにロサーノ氏は、そのようなメキシコ独自の芸術の確立には、多くの日本人芸術家が関与していると、北川民次ほか、20世紀前半にメキシコで活躍した何人かの画家、彫刻家の名前を挙げた。

ロサーノ氏に限らず、これはメキシコ側参加者の特徴で、日墨の文化交流の歴史をよく勉強し、必ず何人かの人物名に言及した。メキシコ人として必ず名前が挙がるのが、20世紀初頭に日本の紹介を行なった詩人ファン・ホ

セ・タブラーダ、それから第二次世界大戦後に外交官として日墨の交流再開に尽くした、ノーベル文学賞詩人のオクタビオ・パスである。一方、メキシコ芸術のなかで活躍した日本人としては、ルイス西沢、佐野碩、藤田嗣治、イサム・ノグチ、岡本太郎、それに現役で活躍しておられるヴァイオリニストの黒沼ユリ子氏といった名前が並ぶ。

もう一点、私が関心を引かれたのは、メキシコ側の参加者のほとんどが、日本は伝統文化の保持と近代化の推進を見事に両立させたとして、評価することだった。その見方は間違っていないのかもしれないが、日本に生きている者としては、明治維新と第二次世界大戦でもたらされた断絶のほうを強く感じていたりもする。その断絶とは、外からの近代化が日本に強い傷であり、アメリカによる近代化を強いられてきたメキシコと共有できる体験だと思っ。ゆえに、もはや自分の一部として刻み込まれている断絶の感覚を、はっきりと表現していく必要がある、と感じたのだった。

イサム・ノグチの壁画レリーフ ◆

すべてのセッションが終了したあと、



イサム・ノグチの壁画レリーフ「メキシコの歴史」。メキシコ・シティの庶民的な市場の一角に今もある。メキシコ革命の熱気あふれる壁画運動の影響が全面に現れている 撮影：筆者

参加者の有志とともに、私はイサム・ノグチが残した壁画レリーフを見に行った。セッションでの言及が心に残っていたためである。

着いたのは、どこにでもある庶民的な2階建ての市場だった。メキシコ革命後、壁画運動が隆盛を極めていた1930年代、行政は旧市街を整備し、衛生状態を改善するため、通りにあふれる露店を屋内の市場に集め、その内壁に壁画を描かせた。そんなプロジェクトの一つに、イサム・ノグチは参加したのだという。

「メキシコの歴史」と題するその大きな壁画彫刻は、本当にイサム・ノグチの作品かと疑いたくなるほど、政治的イデオロギーが前面に打ち出されている。権力に虐げられる民衆の姿が象徴的に浮き彫りにされ、そのなかから人民が立ちあがり、ツルハシで圧政をはねのけ、明るい未来を実現する、というストーリーが、わかりやすく理解できる。メキシコ社会のなまの空気を吸って、壁画運動に侵食され、イサム・ノグチがこの時代のメキシコ色に深く染まっているさまが、はつきりと見てとれる。しかし、突きあげられた握りこぶしだとかドクロだとかの、圧倒的

な力強さと柔らかさを含んだ曲面は、イサム・ノグチらしさそのものでもあった。

◆ 日常の感覚と文化交流の現場

ひとしきりその迫力に呑み込まれたあと、ふと手前の柱を見ると、手書きのお知らせが貼ってあり、「子宮癌検診 無料 9日から12日まで」などと書いてある。壁画の脇には、子どもの非行についての相談所。そう、この市場の2階は、貧困層のための福祉事務所みたいな場所なのだ。そんななかに、誰にも気づかれなほいどひっそりと、レリーフはたたずんでいる。

これがメキシコであり、イサム・ノグチだと、私は得心した。「この作品をここに埋もれさせておくのはもったいない」という意見もあり、私も確かにもっと広く存在を知られていいはずだと同感しつつ、この空間にあるから意味がある、とも思った。

サミットの間じゅう、さまざまに日墨の文化交流のあり方をイメージしたが、ここにモデルがあるじゃないか、と思った。私はイサム・ノグチを、文化を国民国家のアイデンティティから解き放った人だと見なしている。彼の

行なったことはある意味でグローバル化とも言えるけれど、今、問題となっているような均質化、一様化の方向へ進むようなグローバルゼーションではない。どこかに組み込むことのできない、しかし非常に身近なものである文化を、イサム・ノグチは具現化した。そのスタートが、雑多でカジュアルなメキシコの市場につくった壁画だった。ともかくメキシコに飛び込んでみたから体得できたのだ。

さらに数日後、私は世界遺産ともなっている建築家ルイス・バラガンの邸宅を見に行った。ガイドが必ず付くのだが、マヤ地方出身のその青年は、日本に住んだことがあるという。聞けば、メキシコに惹かれた日本人アーティストたちがどのような感覚でメキシコを眺めたのか知りたくて、いきなり日本に行つたのだそう。日本人の日常の感覚を身につけて、その感覚でメキシコを見てみようとしているのだ。

これが文化交流の現場だと私は思った。行ってみなければ、その土地の空気は吸えない。空気を吸わなくてはわからないことがある。来年は、メキシコ側の参加者たちが日本に来ることになっている。●